

日本語学校教員の聴解授業に対する認識

——質問紙調査にもとづいて——

白 鳥 藍

1. はじめに

横山（2004）では、聴解が言語学習における中心的な役割を果たすと考えられているにも関わらず、その指導方法の開発は「話す」「読む」「書く」の3技能と比べて遅れている、と指摘されている（p185）。この遅れの要因の1つとして、日本語教育での聴解指導自体が、他の技能と比べてそれほど重要視されていない、ということが考えられるのではないだろうか。

宮城（2005）では、現在の日本語教育における音声言語指導の実態としては、「聞き取り」や「聴解」の時間が設けられ、担当者が決められたのち、その指導は担当者に任されるといふ手順で行われているところが多い、と述べられている（p48）。また、担当者は担当するクラスのレベルに合わせた指導を、各レベルの教材とされる既成の教材や自分の経験上の認識を頼りにして行っている、とされている（p48）。また、大森（2013）においては、「聴解はふまえる経験もなければマニュアルもなく、教師が参考にできるものが他の技能より少ないといえる」という教師の困難点を指摘している（p23）。

では、実際の日本語教育の聴解指導はどのような状況であろうか。本稿では、この課題に対して、国内の日本語学校で勤務している日本語教員を対象に、調査を行い、実態を明らかにする。

2. 調査概要

本調査では、「聴解の授業についてのアンケート」を実施し、①教員が聴解教育についてどう考えているか、②現場では聴解教育がどの程度行われているのか、③初級と中級での聴解教育の違いがあるのかという3点を明らかにすべく、実態調査をおこなった。

調査方法は、調査対象者に質問紙調査を渡す、またはメールにて送り、趣旨と個人情報保護について説明をした後、質問紙調査は持ち帰ってもらい、後日、解答用紙を回収した。回答は google フォームにて集計した。

調査対象者は都内の日本語学校で日本語教員をしている69名で、有効回答数は63名であった。なお、初級のみ、中級のみしか教えていない教員が2名、回答形式が合っていない教員が4名いたためそれらは今回は有効回答としなかった。その結果対象者は63名となった。ま

た、日本語教育歴は1年未満が1名、1～3年が16名、3～5年が13名、5～10年が16名、10年以上が17名であった。

また、質問項目については、以下の資料を参考に抽出した。

- 1) 宮城 (2005) において示されている「大学進学を目指す学習者に対する聴解の指導目標」という観点でまとめられた資料
- 2) 『みんなの日本語Ⅰ』での「問題」部分の「短い会話のやり取りを聞いて要点を把握するための練習である」という説明
- 3) 『毎日の聞き取り50日上』に記載されていた「促音や長音、撥音などの学習者の聞き誤りがちな部分にも焦点を当て、音声的な表現を正確に聞き取る力」を養うことや「背景的な知識や常識を活用しながら聞くこと」をねらいとした練習であるという説明
- 4) 『新毎日の聞きとり50日上』に記載されていた「語句の使い方や助詞の使い方など、正確な理解を促す練習や指導を十分に」行う必要があるという説明
- 5) 『日本語能力試験出題基準』の「聴解試験の特色」として「課題の解決にとって重要でない部分に含まれている未知の語彙や構文に振り回されることなく、例えば重要な部分のみに絞って聞き取るということが非常に大切な作業」(p194) であるという説明

また、教師の教育歴と実際の聴解指導との関係を検証するため、聴解の授業について、教授法を習ったり勉強したりしたことはあるか、という質問項目を加えた。さらに他技能との優先度の差を見るため、聴解の技能を優先して教えていると思うか、という質問項目も入れた。

以上の検討から、質問項目は、以下の7項目とした。

- ・聴解の技能の優先度について
- ・聴解の授業での重点
- ・聴解の授業での困難点、問題点
- ・教員自身の聴解指導についての学習歴
- ・使用する聴解教材
- ・聴解の授業の1週間の中での頻度
- ・1日の授業スケジュールにおける聴解の優先度

3. 調査結果

3.1 聴解の技能の優先度について

質問1、2では、「他の技能（書く、読む、話す等）と比べて、聴解の技能を優先して教えていると思うか」ということを初級・中級それぞれについて4肢選択式で聞いた（図1、2）。初級では、「他の技能と比べて聴解の技能を優先して教えている」ことについて「あまり思わない」人が79.4%で最も多かった。次いで、「思う」人が12.7%であった。「思わない」

【質問1】他の技能と比べて聴解を優先していると思うか（初級）

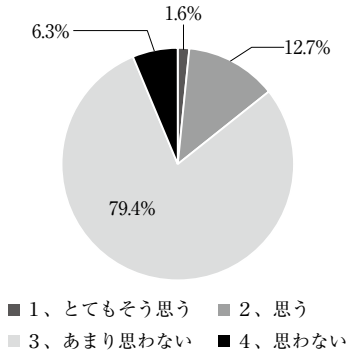


図1 初級における他の技能との優先度の違い

【質問2】他の技能と比べて聴解を優先していると思うか（中級）

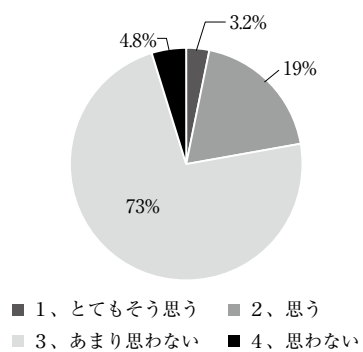


図2 中級における他の技能との優先度の違い

人も、わずかではあるが6.3%いた。

中級でも「あまり思わない」人が73%で最も多かった。次いで、「思う」人が19%であった。中級の方が、「思う」と答えた人が6.3%高かった。初級でも中級でも、教員の気持ちの面では、書く、読む、話す等の他の技能と比べて、聴解の技能を優先して教えている、とはあまり考えていないことがわかった。

3.2 聴解の授業での重点

次に、質問3では、聴解の授業を行う際に、どんなことに重点を置いて指導しているか、初級・中級それぞれについて多肢選択式で聞いた（図3、4）。これらの問題では複数回答を認めた。選択肢は以下の通りである。「12、その他」は自由記述とした。

- 1、聞き取りにくい音（母音の連続、無声化、長短音、拗音、促音など）がわかること
- 2、言いよどみ、繰り返し、言いなおし、フィラー、倒置などの表現がわかること
- 3、文ごとに、文法事項（文の構造、助詞、動詞や形容詞の活用、使役や受身など）がわかること
- 4、待遇表現や終助詞によって登場人物の関係や、人間関係を理解すること
- 5、内容や結果を予測すること
- 6、全体の内容（要旨、大意）を把握すること
- 7、多くの情報の中から必要な情報だけを聞き取ること
- 8、忘れないようにメモを取ったり、絵を描いたりしながら聞けること
- 9、文脈や背景知識から聞き取れなかった部分を類推すること

- 10、分からない部分があっても聞き飛ばして聞けること
- 11、特になし
- 12、その他

図3の通り、初級では、重点を置いている項目として、「1、聞き取りにくい音（母音の連続、無声化、長短音、拗音、促音など）がわかること」が最も多く65.1%、次に「6、全体の内容（要旨、大意）を把握すること」が多く57.1%、次に「3、文ごとに、文法事項（文の構造、助詞、動詞や形容詞の活用、使役や受身など）がわかること」が多く、54%であった。5、9、2の選択肢は15%以下であったが、これらは初級で使用される聴解には短文が多く、また、言い淀みやフィラーなどが入った会話の教材が少ないためだと考えられる。「12、その他」での解答には、聞いて書けるか（ディクテーション）、アクセント、問題に合わせた解答の仕方、注意点など、ポイントになる語彙、表現の説明という記述があった。

また、図4の通り、中級では、「6、全体の内容（要旨、大意）を把握すること」が最も多く77.8%、次に「7、多くの情報の中から必要な情報だけを聞き取ること」が多く66.7%、次に「8、忘れないようにメモを取ったり、絵を描いたりしながら聞けること」が多く、57.1%だった。中級における「12、その他」での解答には、「時事的な言葉を知り、実際によく使われる表現に慣れること」、「再現や要約ができる（中級後半）」という記述があった。

初級と中級の違いとして3点あげられる。1点目は、「7、多くの情報の中から必要な情報だけを聞き取ること」は初級では19%だったが、中級だと66.7%となり、半数以上の教員が中級になるとスキニングの練習を意識しているようである。一番高かった「6、全体の内容（要旨、大意）を把握すること」というスキニングの練習と合わせて、中級になるとスキニングとスキニングの両方に教員は重点を置いて練習しているようである。これは、初級より1回で聞く文章が長くなること、後述もするが、EJU⁽¹⁾やJLPT⁽²⁾の聴解、聴読解の練習が増えることが理由として考えられる。2点目は、初級で最も多かった「1、聞き取りにくい音」の指導は、中級になると19%で、1～10番までの選択肢の中で最も低くなっていた。初級の時には聞き取りにくい音の指導はするが、中級になると音よりも内容の理解への意識が強くなるようである。3点目は、初級では30%以下だった4、5、7、9、10番の選択肢は中級になるといずれも40%以上になっていた。中級になると初級と比べ、確かに1回で聞く量が変わるため、長い文を聞いたうえで全体の内容を把握したり、必要な情報をつかんだり、ということに重点を置いた指導が必要になるのであろう。

こうした初級と中級の結果の違いがあったことから、教員が初級と中級とでは重点を置く項目を変えて指導していることがわかった。しかし、「2、言いよどみ、繰り返し、言いなおし、フィラー、倒置などの表現がわかること」の項目は、初級では12.7%、中級では22.2%とどちらのレベルにおいても25%に満たなかった。これらの表現は聴解の授業において、教員の意識の中ではそれほど重点を置く項目とは思われていないようである。

【質問3-1】 聴解の授業を行う際に、どんなことに重点を置いて指導しているか（初級）

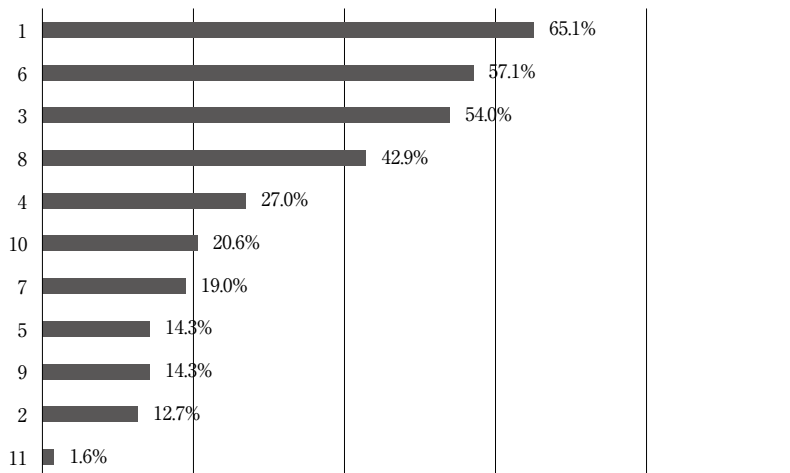


図3 初級における聴解授業での重点について

【質問3-2】 聴解の授業を行う際に、どんなことに重点を置いて指導しているか（中級）

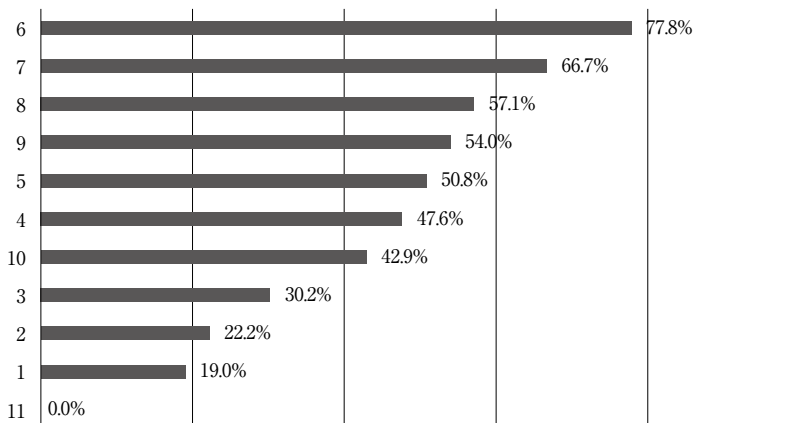


図4 中級における聴解授業での重点について

3.3 聴解の授業での指導上の困難点

次に、質問4では、聴解の授業を行う際に、困っていることや悩んでいることがあるか、初級・中級それぞれについて多肢選択式で聞いた（図5、6）。こちらも複数回答を認めた。選択肢は以下の通りである。「5、その他」は自由記述とした。

【質問 4-1】 聴解の授業を行う際に困っていること、
悩んでいることはあるか（初級）

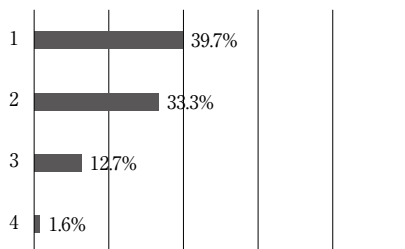


図 5 初級における聴解授業での困難点について

- 1、スケジュールに入っているにもかかわらず時間がなく、できないことが多いこと
- 2、指導方法が分からないこと
(いつも同じ授業内容になってしまう、具体的なポイントや教材の工夫、広げ方が分からない、○×を選ぶだけで単調になってしまう等)
- 3、どの教材を使用すればいいのかが分からないこと
- 4、聴解にそれほど重要性を感じない
- 5、その他 ()

初級では図 5 の通り、聴解の授業を行う際に、困っていることや悩んでいることとして、「1、スケジュールに入っているにもかかわらず時間がなく、できないことが多いこと」が最も多く 39.7%、次に「2、指導方法が分からないこと」が多く 33.3%であった。

また、質問 4 では「その他」に書かれた意見が多岐にわたっており、①学生について、②教材について、③聴解のとらえ方について、④授業内容について、⑤そのほか、という 5 つの categories に分けられた。

【その他】

①学生について

- ・クラス内でレベル差がある場合、どうすればいいのか
- ・学生によってばらつき（できる人できない人）が多いので基準をどこに置くかに困っている

②教材について

- ・教材にわかりにくい問題があって進めにくいこと
- ・全文ディクテ⁽³⁾は重要だが、その後、留試⁽⁴⁾の聴解につなげる教材（できれば語彙も増やせるもの）が欲しい
- ・補助教材を作りたいが時間がない
- ・聴解教材を使うことだけが聴解力をつけるとは考えていません。

【質問 4-2】 聴解の授業を行う際に困っていること、
悩んでいることはあるか（中級）

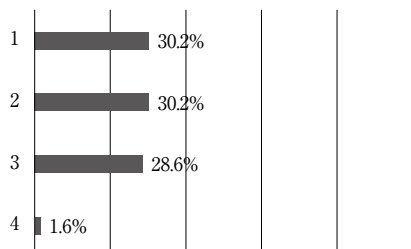


図 6 中級における聴解授業での困難点について

・悩むほど重要視していないと改めて感じた。決まった教材を使い開拓ができていない。

③聴解のとらえ方

- ・聴解の重要性を学校側（スケジュール作成者）があまり理解していない
- ・聴解力の評価法に疑問がある。学生の聴解力の差が大きい。聴解力で分けたクラスではないのにクラス授業を行うのは適切ではないと感じる。

④授業内容について

- ・スケジュールに入っている時間も少なく、できないことが多いこと、クラス内の個人差を考慮しながらどう進めていくかに悩みます
- ・学生の日本語力に差があるため、語彙力の低い学生にも興味を持たせ意義が感じられるような授業の組み立て方に悩みます
- ・単調になってしまうこと
- ・聴解力をつける効果的な指導法はどうしたらいいのか

⑤そのほか

- ・音と文字がリンクしていない
- ・スケジュールにおいて優先順位を高くしても特に初級では時間がなくできずにスルーされてしまうことも多く課題である

また、中級では、図 6 の通り 1 と 2 が同じ 30.2% と最も多かったが、「3、どの教材を使用すればいいのか、が分からないこと」も 28.6% であり、「その他」に書かれた意見からも、中級になると初級と比べて教材についても、スケジュール内での問題や指導方法と同じくらい悩んでいる教員がいることがわかる。

中級でも「その他」に書かれた意見は様々あり、初級同様の 5 つのカテゴリーに分けた。

①学生について

- ・クラス内でレベル差がある場合、どうすればいいのか
- ・学生によってばらつき（できる人できない人）が多いので基準をどこに置くかに困って

いる

- ・シャドーイングや音読、詳細な内容理解や全文ディクテ^⑤なども大切だと感じているが、学生は答えを出すだけを重視し、話を聞き取ろうとしていないように思う。中～下層では聴かせることが難しい。

②教材について

- ・適当な教材があまり多くない（中級の下レベル）
- ・聴解教材を使うことだけが聴解力をつけるとは考えていません。
- ・全文ディクテは重要だが、その後、留試の聴解につなげる教材（できれば語彙も増やせるもの）が欲しい）
- ・補助教材を作りたいが時間がない
- ・いい聴解教材に限られている
- ・試験対策教材の音声のスピードが本番のより遅いこと
- ・悩むほど重要視していないと改めて感じた。決まった教材を使い開拓ができていない
- ・教材の準備に時間がかかる
- ・聴解教材が量、質ともに足りないこと

③聴解のとらえ方

- ・聴解力の評価法に疑問がある。学生の聴解力の差が大きい。聴解力で分けたクラスではないのにクラス授業を行うのは適切ではないと感じる。
- ・聴解の重要性を学校側（スケジュール作成者）があまり理解していない

④授業内容について

- ・スケジュールに入っても時間がなく、できないことが多いこと、クラス内の個人差を考慮しながらどう進めていかに悩みます
- ・学生の日本語力に差があるため、語彙力の低い学生にも興味を持たせ意義が感じられるような授業の組み立て方に悩みます
- ・単調になってしまうこと
- ・ときにどこで学生がつまずくのか見えず、その時自身がうまく説明できないなど

⑤そのほか

- ・音と文字がリンクしていない

初級と中級の違いとしては、初級では「1、スケジュールに入っても時間がなく、できないことが多いこと」が約40%の教員が悩んでいる点として選んでいるが、中級になるとその問題点と同じ割合で指導方法や教材の問題点が浮上しているようである。3.2において教員が初級と中級とで重点を置く部分を変えて指導していることがわかったが、「その他」に書かれた意見を見る限り、非常に悩みながら指導をしていることが窺える。特に、中級では教材についての悩んでいる点での記述が増えており、「適切だ」と思われる教材が不足しているという意識があるようである。また、これはCD等の機械からの音声を聴解能力に差

がある学生が、同時に、同じスピードで聞いていかなければならないという他の技能とは異なる事情も授業を進める上での問題の原因となる理由の1つだと考えられる。

3.4 教員の聴解指導についての学習歴

次に、これまでに聴解の授業について、教授法を習った、勉強したことはあるか、初級・中級それぞれについて多肢選択式で聞き、複数回答を認めた（図7、8）。選択肢は以下の通りである。「7、その他」は自由記述とした。

- 1、専任の先生や、先輩の先生から良い方法を教えてもらった
- 2、日本語学校でのやり方が統一されて決まっているので、それに従っている
- 3、養成講座で勉強した
- 4、教材に書いてある使い方を参考にしている
- 5、自身で聴解の授業方法に関する本を読んだ

【質問5-1】 これまでに聴解の授業について、
教授法を習った、勉強したことはあるか（初級）

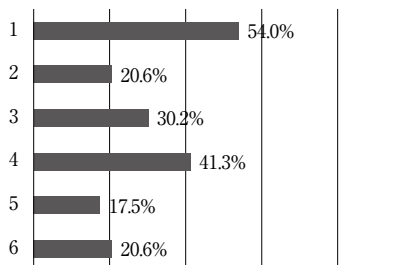


図7 初級の聴解の授業についての教員自身の学習歴

【質問5-2】 これまでに聴解の授業について、
教授法を習った、勉強したことはあるか（中級）

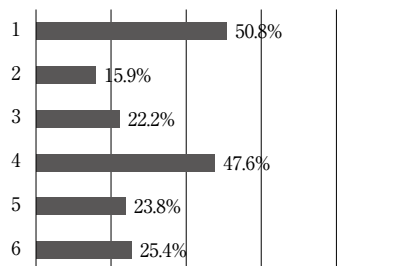


図8 中級の聴解の授業についての教員自身の学習歴

6、特に習ったことはない

7、その他（ ）

初級では、「1、専任の先生や、先輩の先生から良い方法を教えてもらった」が最も多く54%、次に、「4、教材に書いてある使い方を参考にしている」が多く41.3%であった。「6、特に習ったことはない」という回答も20.6%あった。

中級でも、「1、専任の先生や、先輩の先生から良い方法を教えてもらった」が最も多く50.8%、次に、「4、教材に書いてある使い方を参考にしている」が多く47.6%であった。初級と比べると、「2、日本語学校でのやり方が統一されて決まっているので、それに従っている」という回答が20.6%から15.9%と減り、やり方がさほど決まっていなかったこともあってか、「5、自身で聴解の授業方法に関する本を読んだ」という回答が17.5%から23.8%へ増えている。また、中級では、「6、特に習ったことはない」という回答は25.4%にあがった。

今回の結果を見る限りでは、初級・中級どちらも日本語学校での統一された指導法が確立されているというよりも、各日本語学校での専任の先生や、先輩の先生から良い方法を教えてもらい、それを実践しているというのが現状のようである。この場合、その「良い方法」というのが各クラスや使用教材に適しているのか、聴解能力を伸ばすことに繋がるのか、といった点で問題があると考えられる。

また、「7、その他」の回答には、「大学で勉強した」、「自分の外国語学習の経験から。英語通訳訓練を受けた」、「新人研修（他校）で学んだ」、「自身の語学学習の際に参考になりそうな方法を応用している」、「ワークショップなど」といった記述があり、自身の語学学習を反映して、日本語教育に繋げている教員もいることがわかった。

3.5 使用する聴解教材について

次に、使用する聴解教材はどのような教材が多いか、初級・中級それぞれについて多肢選択式で聞き、複数回答を認めた（図9、10）。選択肢は以下の通りである。

- 1、総合テキストや文法のテキストに付随した教材（『みんなの日本語聴解タスク』など）
- 2、聴解だけの教材（『毎日の聞き取り50日』『新毎日の聞き取り』『留学生のためのアカデミックジャパニーズ』など）
- 3、生教材（『NHK NEWS WEB EAZY』など）
- 4、JLPT や EJU 対策の聴解問題集

使用する聴解教材については、図9の通り、初級では、「1、総合テキストや文法のテキストに付随した教材」が最も多く、92.1%であった。次いで、「2、聴解だけの教材」が多く、49.2%であった。「3、生教材（『NHK NEWS WEB EAZY』など）」は4.8%と他の選択肢と比べると低く、初級では聴解の生教材は使われていないようである。

【質問 6-1】 使用する聴解教材は
どのような教材が多いか（初級）

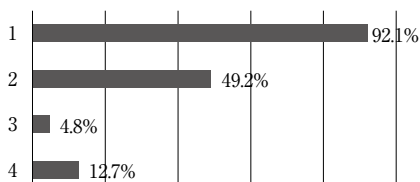


図 9 初級で使用する聴解教材

【質問 6-2】 使用する聴解教材は
どのような教材が多いか（中級）

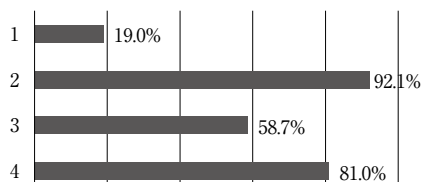


図10 中級で使用する聴解教材

中級では初級とは異なり、図10の通り「2、聴解だけの教材」が最も多く、92.1%であった。次いで「4、JLPT や EJU 対策の聴解問題集」が多く、81%であった。また、「3、生教材（『NHK NEWS WEB EAZY』など）」は初級では4.8%であったが、中級になると58.7%と50%以上上がっていた。初級で最も多かった「1、総合テキストや文法のテキストに付随した教材」は中級では19%となり、中級の中では一番低くなっていた。また、中級では、「3、生教材」や「4、JLPT や EJU 対策の聴解問題集」も初級と比べて50%以上高くなり、中級では教材の幅が広がっており、その教材の幅が広がるために、3.3で述べたように指導において困っていることが増えると推測される。

3.6 1週間のうちの聴解授業の頻度

次に、担当しているクラスで、聴解の授業は1週間にどのくらいおこなわれているか、ということについて45分を1コマと考えて、初級・中級それぞれについて4肢選択式で聞いた（図11、12）。この問題については、複数回答は認めず、1択での回答とした。

- 1、1週間に1コマ（週に1回程度）
- 2、1週間に2～3コマ（週に2～3回程度）
- 3、1週間に4～5コマ（週に4回、または、ほとんど毎日）
- 4、1週間に1コマより少ない（2週間に1回程度）またはそれ以下の頻度

初級では図11の通り、「2、1週間に2～3コマ（週に2～3回程度）」が最も多く、49.2%であった。ついで、「3、1週間に4～5コマ（週に4回、または、ほとんど毎日）」が多く、28.6%であった。

中級は図12の通り、「3、1週間に4～5コマ（週に4回、または、ほとんど毎日）」が最も多く、47.6%であった。ついで、「2、1週間に2～3コマ（週に2～3回程度）」が多く、38.1%であった。初級に比べて中級になると聴解の授業が増えているようである。

しかし、週に4回、またはほとんど毎日聴解の授業が行われているものの、3.1で述べた

【質問7-1】担当しているクラスで、聴解の授業は1週間にどのくらいおこなわれているか（初級）

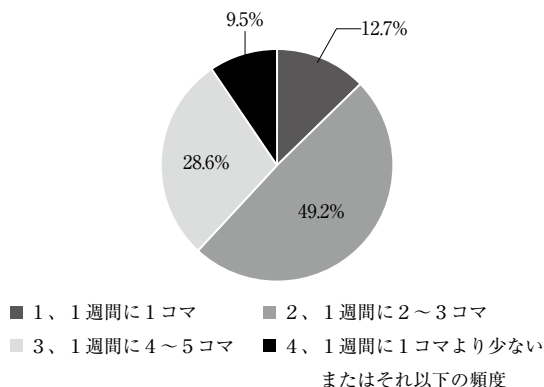


図11 1週間における初級の聴解の授業頻度

【質問7-2】担当しているクラスで、聴解の授業は1週間にどのくらいおこなわれているか（中級）

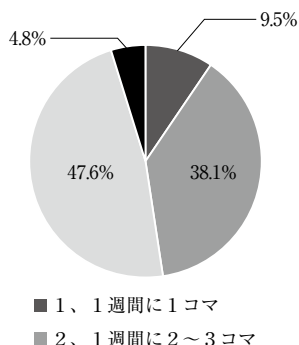


図12 1週間における中級の聴解の授業頻度

結果からは「他の技能と比べて優先しているとはあまり思わない」と答えた割合は7割であった。ほとんど毎日、聴解の授業を行っていても、教員の意識の中では、優先度が低いことがうかがえた。

3.7 スケジュールにおける聴解の優先度

次に、その日の授業スケジュールの中で、スケジュール通りに終わらない場合、聴解を優先しておこなうことはあるか、ということをも4肢選択式で聞いた。(図13)。この問題については、複数回答は認めず、1択での回答とした。これは例えば、残りの時間で文法項目1つと聴解をやることになっているが、両方は時間がなくできない場合、文法項目は明日に回し

【質問8】 その日の授業スケジュールの中で、スケジュール通りに終わらない場合、聴解を優先しておこなうことはあるか。

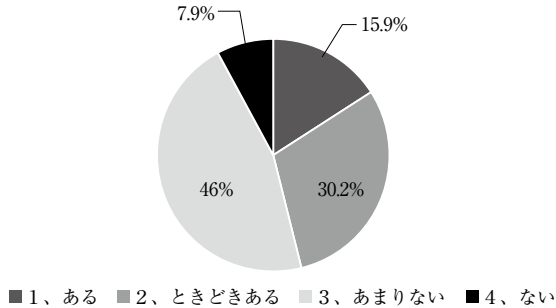


図13 授業スケジュール内での聴解の優先度

て、聴解を優先する、などの事例である。

図13の通り、「3、あまりない」が最も多く46%であった。次いで多かったのは、「2、ときどきある」で30.2%であった。教員の意識の中では、スケジュール内での優先度が低いことが、この結果からもいえるのではないか。しかし、優先することが「ときどきある」または「ある」と答えた教員も合わせると46.1%はおり、意識の中で優先度は低くても、実際の授業では優先して行う教員が半数近くはいるようである。教員の意識と実際の行動のずれが生じているようである。

4. 考察

以上の質問項目の結果を踏まえて考察していきたい。

調査目的①「教員が聴解教育についてどう考えているか」ということについては、7割以上の教員が初級、中級いずれにおいても、他の技能と比べて聴解の技能を優先して教えている、とはあまり思っていないことが分かった。

また、②「現場では聴解教育がどの程度行われているのか」ということについては、今回の調査の中では、初級では「1週間に2～3コマ（週に2～3回程度）」であるのが、中級になると「1週間に4～5コマ（週に4回、または、ほとんど毎日）」となり、初級に比べて中級になると聴解の授業が増えているようである。しかし、スケジュール通りに終わらない場合、半数の割合の教員が聴解を優先しておこなうことはあまりないことがわかり、スケジュールに入っているとしてもそれができないこと、または、スケジュール作成者としては聴解をやってもらえないことが、聴解授業の中での悩みの1つになっていることもわかった。

そして、③「初級と中級での聴解教育の違いがあるのか」ということについては、初級では教科書の付属の聴解教材を使うことが最も多かったのが、中級では生教材やJLPT等の試験対策まで、聴解教材の幅が広がる、という違いがあった。また、その教材の影響もあり、

指導する際に項目初級では「1、聞き取りにくい音」の指導が最も多かったが、中級になると、スキミングとスキヤニングのどちらの技術の習得にも重点を置く指導に変わっていた。さらに、その教材の幅が広がるために、指導において困っていることが中級になるとさらに増えることが考えられた。

また、今回の実態調査の結果から次の問題点も指摘できる。1点目は、聴解指導には明確なカリキュラムや指針がなく、指導方法に一貫性がない、ということである。3.4でも述べたように、聴解の授業について、初級・中級どちらも日本語学校での統一された指導法や指針が確立されているというよりも、専任の先生や、先輩の先生から良い方法を教えてもらい、それを実践している教員の方が多いようである。しかし、この現状だとどこをゴールとして練習すべきか、聴解をどのように捉えるべきか、教員によって解釈が揺れ、その分、指導する際も悩みが増えてしまうのではないだろうか。

2点目は、4技能のバランスが取れていないスケジュールなのではないか、ということである。先述したように、7割以上の教員が他の技能と比べて聴解の技能を優先して教えている、とはあまり思っておらず、実際に、スケジュールに聴解が入っていても時間の問題で出来ない場合は、半数の教員は聴解を優先しておこなうことはあまりない。また、3.3での聴解の授業に際し、悩んでいることの記述として、中級になるとクラス内のレベル差が大きくなってしまふこと、適切と思われる教材がないことといった内容が増えたが、そうした原因もあって、スケジュールに他の技能の練習とともに入れにくくなっていることも考えられる。

今回の調査からは、教員が聴解の授業をするにあたり、教科書の内容に忠実に教えていることはうかがえたが、使用教材の選定や指導方法、教員同士での聴解に対する考え方の違い等、悩みながら授業を行っている現状が見えてきた。横山（2008）では、海外の日本語教育現場では聴解指導は軽視される傾向にあることを指摘している（p3）。今回の調査の回答からも、特に中級になるにつれて、悩みが多くなっていくがために、優先して指導する状況ではなく、結果的に「軽視される」傾向にあると考えられる。聴解の授業は、クラス授業において個人の能力に差があったとしても、全員が同時に、同じスピードで音声を聞いていかなければならないという点で、他の技能とは大きく異なっている。そのため、教材の選定から活動の幅の広げ方まで困難点が多くなっていくのであろう。教員同士での指導方法、目標地点、他の技能との優先度といったことを共有していくことが、より大事であり、現状の解決に繋がると言える。

注

- (1) 日本留学試験
- (2) 日本語能力試験
- (3) 聞いた文章の全部をディクテーションで書き取らせる練習方法
- (4) 注1に同じ
- (5) 注3に同じ

引用文献

- ・大森雅美 (著) (2013) 『聴解授業の作り方編 (日本語教師の7つ道具シリーズ6)』アルク
- ・宮城幸枝 (2005) 「音声言語能力向上を目指した聴解指導シラバス」『東海大学紀要留学生教育センター』(25)、47-55
- ・横山紀子 (2004) 「第2言語における聴解ストラテジー研究：概観と今後の展望」『言語文化と日本語教育 増刊特集号、第二言語習得・教育の研究最前線』184-201
- ・横山紀子 (2008) 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』「シリーズ言語学と言語教育、15」ひつじ書房

参考資料

- ・加藤早苗、芥川泰子、石田幸絵、金井尚美、後藤直美 (著) (2011) 『日本留学試験速攻トレーニング聴解編』アルク
- ・国際交流基金 (編) (2002) 『日本語能力試験 出題基準 改訂版』凡人社
- ・東京外国語大学留学生日本語教育センター (編) 『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解中級』(2013) スリーエーネットワーク
- ・中村かおり、福島佐知、友松悦子 (著) (2012) 『新完全マスター聴解 日本語能力試験N3』スリーエーネットワーク
- ・日本学生支援機構 (編) (2017) 『平成29年度日本留学試験 (第1回) 試験問題』凡人社
- ・『NEWS WEB EASY』<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/> (2019年10月14日)
- ・星野恵子、辻和子 (著) (2014) 『ドリル & ドリル日本語能力試験N3 聴解・読解』ユニコム
- ・牧野昭子、田中よね、北川逸子 (著) (2017) 『みんなの日本語初級I 第2版 聴解タスク25』スリーエーネットワーク
- ・『みんなの日本語初級I 第2版本冊』(2012) スリーエーネットワーク
- ・宮城幸枝 (1988) 「行動としての「聞き取り」：その分析と指導法について」『東海大学紀要留学生教育センター』(8)、71-80
- ・宮城幸枝 (2002) 「総合日本語力を高めるための「音声教材」の活用：中級レベルの指導を中心に」『東海大学紀要留学生教育センター』(22)、41-53
- ・宮城幸枝 (2003) 「学部留学生の学習上の困難点を探る一留学生の学習・指導に関するアンケート調査の分析を通して」『東海大学紀要留学生教育センター』(23)、31-44
- ・宮城幸枝、太田淑子、柴田正子、牧野恵子、三井昭子 (著) (2007) 『新毎日の聞きとり50日 上 第2版』凡人社
- ・宮城幸枝、三井昭子、牧野恵子、柴田正子、太田淑子 (著) (2010) 『初級日本語聴解練習 毎日の聞きとり50日 上・下 新装版』凡人社
- ・宮城幸枝、柴田正子、牧野恵子、三井昭子、太田淑子 (著) (2011) 『新毎日の聞きとり50日 下 第2版』凡人社